

佐倉市の文化財を活用した学習指導（1）

芝千秋の絵画を用いて

鈴木 健一

The learning instruction that utilized cultural assets of Sakura-city (1)
Using the painting of Sensyu Siba

Kenichi SUZUKI

本学は佐倉市に位置し、環境はもちろん実習や通学合宿などの活動でも、その恩恵を受けている。

佐倉市は、また、他に誇れる文化施設や文化財を有してもいる。今回は佐倉市立美術館が所蔵している美術作品を活用した学習活動を計画し実践した。作品を手にとって間近に鑑賞することによって、学生たちは作品そのものへの理解を深めることができ、新鮮な感動を文章に表すことができた。

I はじめに

わたしたちは、感動体験を得ると、それを表現したくなる。これは、子どもたちも学生たちも同様である。

感動体験は、わたしたちの「心を豊かに」してくれるものである。また、表現することによって「感動を再認識」したり、コミュニケーションを通しての「文化理解」ができ、「共生」へ繋がっていくものであると考えられる。

本学に学ぶ学生たちは、保育士や幼稚園または小学校の教諭を目指している。彼らが豊かな心をもつこと、また、物を見てそのすばらしさを受け止め味わえる力を持ち、さらにそれを表現できることは、子どもたちを導き育てていくうえで重要なことである。

II 鑑賞文の指導

1 鑑賞の意味合い

鑑賞とは、一般的には「芸術作品を理解し、味わうこと」（広辞苑）と定義される。音楽や美術作品を対象としてなされる活動であり、丸ごと受け止めて内容に迫り、作者の思いにまで入り込んでいくものである。主体的な創造的な活動であるとも言える。また、そこには鑑賞者の経験や今置かれている状況、考え方や見方等も関わってくるので、「人間」が反映さ

れる活動と言うこともできよう。

2 鑑賞文の指導

(1) 鑑賞教育

鑑賞教育に関わって、次のような指摘がある。

- ・「戦後すぐの時期には、国の産業発展のために国民の美的価値判断能力を形成することに鑑賞教育の目的がおかれていたが、現在では個人の美的感性を豊かにするだけでなく、社会の国際化にともなう異文化理解の必要性や、その表裏である日本文化の基礎的理解の推進、さらには生涯教育の視点などから鑑賞教育に求められる役割は重くなり、機能が拡張している。¹⁾」
- ・「知識獲得的な鑑賞教育から脱却し、子どもたちが自ら課題を発見し解決に向かう、体験的で能動的な学習を促す鑑賞教育の実現が望まれる。²⁾」

鑑賞教育に求められるものは、知識の獲得にとどまらず、個人の感性を豊かにすることであり、内外の文化を理解させ、生涯にわたって主体的に学んでいく姿勢を培うことであると言えよう。

(2) 芸術教科における鑑賞指導

教育現場における鑑賞指導は、主として芸術教科（音楽、図画工作または美術）においてなされている。

小学校学習指導要領によると、教科「音楽」の目標は、
「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」
とある。

また、教科「図画工作」の目標は、
「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」
となっている。（下線は筆者がつけたもの）

両教科の目標の内容や構造は非常に近いものであり、指導内容の領域はどちらもA表現、B鑑賞の2領域で構成されている。両教科において鑑賞は、指導の両輪のうちの一つというきわめて重要なものに位置付けられている。これらのことは中学校学習指導要領でも同じである。

(3) 国語科における鑑賞文指導

国語科の場合はどうであろうか。小学校学習指導要領では「鑑賞」「鑑賞文」という表現は使われていない。内容的に鑑賞文の指導と言えそうなものは、第5学年及び第6学年の「B書くこと」の言語活動例に見られる。そこには、

「ウ 事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと」と示されている。

中学校学習指導要領では、「B書くこと」の第1学年の言語活動例に

「ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと」と、「鑑賞」の語が明記されている。

「鑑賞」という語のあるなしに関わらず、書くことの学習の一つとして組み込まれており、音楽、絵画や彫刻などの作品を題材にした表現活動が行われている。ここでは音楽科や図画工作科（美術科）との連携も考えられる。

また、国語科の場合は、詩歌や文学作品（古典を含む）を対象にした鑑賞の学習も行われている。

3 芝作品の導入

（１）ねらい

本学の1年生が学ぶ教科に「文章表現法」を設けている。文章を書くうえでの要点や留意点を学び、実際に書いて評価し合うという内容のものである。その中の1コマに「鑑賞文を書く」というテーマで学ぶ時間を設定している。

十分な鑑賞文が書けるためには、書く内容が必要である。その内容は、対象となる物が興味や関心を引く物であり感動を呼ぶ物でなければ、明確になってこないし、相手に伝えて分かってもらうこともできない。学生たちが驚きをもって見つけ、新たな発見もできる作品が必要であった。

また、本学が佐倉市にあることから、佐倉市に関係する物を用いることによって、地域理解や地域連携に繋がりたいという思いもあった。

このような必要性や思いに応えられるものとして、佐倉市立美術館の所蔵する芝千秋の絵画作品を使わせていただくことにした。作品の特徴は、

- ・本物（肉筆）である
- ・100年ほど前に描かれている
- ・鉛筆画が多く、水彩画も淡い色遣いである
- ・細かい所まで描かれている

などが挙げられる。これらの作品に直接触れることで驚きや新たな発見につながり、鑑賞文に結実していくことを期待した。

（２）学習計画

①準備

作品の選定については次のように行った。

- ・専門家の視点から鑑賞文につながりやすいものを推薦いただく。
- ・授業者の希望（人物や動物も描かれている、季節感が感じられる、四季それぞれの作品がそろそろ）を伝えて検討し、決定する。

作品数は学生が一人ずつ順に選んでいっても十分に余裕があるようにと考え、合計32点とした。

作品は授業教室内に掲示しておく。

〔選定した作品〕資料1



①



②



③



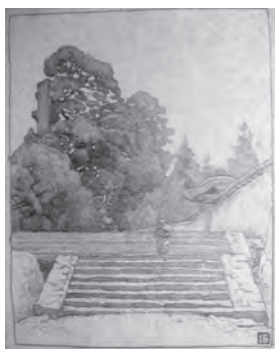
④



⑤



⑥



⑦



⑧

佐倉市の文化財を活用した学習指導（1）芝千秋の絵画を用いて



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



⑯



⑰



⑱



⑲



⑳



㉑



㉒



㉓



㉔

佐倉市の文化財を活用した学習指導（1）芝千秋の絵画を用いて



②5



②6



②7



②8



②9



③0



③1



③2

②学習活動の流れ

・鑑賞文の要点を確認する。

〔鑑賞文学習のレジュメ〕資料2

「文章表現法」
第10回
12 /

1 書く目的



目的は何か
(例)・作品のすばらしさ・価値を確認(再認識)する。
・作品のすばらしさ・価値を紹介する。

目的をはっきり意識する。

2 心がけたいこと

(1) 最初の印象を大切に
・どんなふう思ったか。
・それはどうしてか。

(2) 作品に迫ろう。
①まず、じっくりと見よう。
・遠くから、近くから、細かいところまで
②分かることを整理しよう。
・何(どんなもの・こと)が描かれているか
・季節はいつか
・どんな情景か
*人物が描かれている場合、
・その人たちは何をしているのだろうか

③すばらしさ・価値を確認しよう
・どこがすばらしいか

- ・題材
- ・描き方(描写・抽象・縮尺・視点)
- ・構図(人物や物の配置)
- ・色遣い
- ・その他

最初の印象を大切にし、
作品に描かれていることを明確にとらえ、
すばらしさを確認する。

(3) 自分と結び付けて考えてみよう
・どんなことが思い出されるか
・どんな気持ちになるか
・この作品に題名をつけるとしたら

自分の経験と結び付けて考えたり感じとったりする。

(4) 構成する
・最も伝えたいことを明確にする。
・その他にいくつかの材料を選び、順番を考える

最も伝えたいことを中心にし、材料を選び、順番を考える。

3 書いてみよう。

今回は、一枚の絵を選び、そのすばらしさや価値を伝える鑑賞文を書いてみましょう。

- ・全ての作品を閲覧する。
- ・作品を1点選ぶ。かち合った場合は、当事者同士で話し合って決定する。
- ・作品を間近からじっくり眺め、鑑賞文のためのメモをつくる。

〔メモの記入例〕資料3

「文章表現法」 第10回 12

「鑑賞文を書く」 メモ *鑑賞文と一緒に提出

クラス	学籍番号	氏名	
-----	------	----	--

◎あなたが選んだ作品は

No. 24

◎その作品を選んだわけは？

丘の大地の表面の凸凹のわずかな変化。木と草の生きた様子や影の描写による日の光の温もり。やわらかい印象。木の枝、葉のつらさの距離感。

◎作品に題名をつけるとしたら？

野の中

〔メモ〕

近この木々の生きた様子や影の描写による日の光の温もり。やわらかい印象。木の枝、葉のつらさの距離感。

丘の大地の表面の凸凹のわずかな変化。木と草の生きた様子や影の描写による日の光の温もり。やわらかい印象。木の枝、葉のつらさの距離感。

現代では異なな雄大な雲の回と。いつまでも見せられよう。息を吐くように。

- ・鑑賞文を書く

(3) 学生が選んだ作品

受講者は、A-1クラス19名、A-2クラス17名、B-1クラス20名、B-2クラス14名、Eクラス17名の合計87名であった。作品毎の選んだ人数は次の表1の通りである。全てのクラスで選ばれると5になる。最多の5人に選ばれた作品は、①、②、②②、②⑨の4作品であった。残念ながら一度も選ばれなかった作品もあるが、それ以外の作品は選ばれて鑑賞文が書かれている。

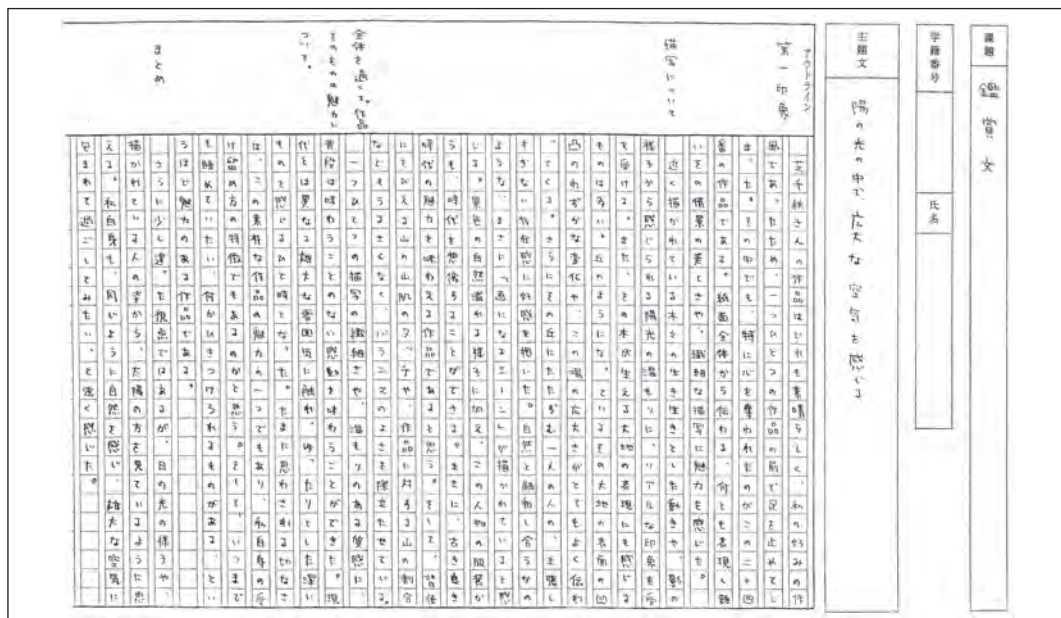
芝作品の選択結果 ○印は選択者がいたことをしめす。(表1)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲		
A-1	○	○	○	○		○				○				○	○		○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
A-2	○	○			○	○	○		○	○	○				○	○	○	○			○				○														
B-1	○	○	○	○		○	○	○					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
B-2	○	○		○	○		○						○		○						○	○																	
E	○	○		○			○			○	○	○		○			○	○						○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
計	5	5	2	4	2	2	3	3	0	3	3	2	1	3	1	2	4	2	3	1	3	5	1	3	1	4	2	3	5	3	3	3	3	3	3	3	3		

(4) 鑑賞文

鑑賞文は所定の用紙に書かれている。

〔鑑賞文の記入例〕 資料 4



学生は選んだ作品を手元に置き、時間を掛けてじっくりと見、複数の視点から観察して書いている。そこには各自の知識やものとのとらえ方が反映されている。いくつか例を挙げる。

②6の鑑賞文

この絵に感じるのはピリッとした広がりだ。焦点をあてて描かれている木には、ところどころ切断されたような枝が見受けられる。おそらくこの木は、人の手が加えられており、この木の自由に育つことは許されないのだろう。そんな中で、四方八方へ枝を伸ばし大きくなろうとしているエネルギーを感じる。焦点をあてている木の全てを紙に収めるのではなく、枝の先端は紙にはみ出した形（先端は紙の中に収めない）にすることで、より広がりを感じる絵になっていると思う。また、その広がり、木の未来を感じさせる。奥に描かれている太い幹と比べて細く迷いを感じる木の中にも、凜とした雰囲気醸し出させることで、木の未来に明るさが足される。また、奥の太い幹においても、幹のみを描くことで、どのような木なのかを見た者に想像させる。

右奥に人影が二つある。おそらく、子どもと祖母の後ろ姿だ。この子どもと焦点をあてられている木の双方に感じる未来をどのように想うかは、見た者に委ねられる。この子どもが再びこの木を訪れる時、子どもと木はどのような姿で再会するのだろうか。子どもも木も、誰かと一緒かもしれない。どちらも己のみで立っているかもしれない。二度と会わないかもしれない。私が再びこの絵を前にする時は来るのか。来るならば、その時私はどのようなものであるか。この先の期待と不安が混在している作品である。

③の鑑賞文

私がこの作品を選んだ理由は、ごちゃごちゃとよけいなものを入れず、わかりやすく、見た時になつかしさにかられるような不思議な魅力があったからです。

描き方は、基本に忠実に遠い物から描いていくため、主役は一番最後に描かれています。そのため、描いている途中と仕上げで、ガラリと絵が変化します。これは、一番特徴的、主役が一番手前にいなくてはならなくて、私は最後に変化する描き方の絵が好きです。同様に構図も、構図の基本的とり方の一つに十字で描くという手法があります。この絵は横の線を草原で、縦の線を主役の松を入れることで十字になっています。隣に小ぶりの松を入れることで右辺の空白も埋まり、自然な形になっています。また、背景はほとんど線を使わず、えんぴつの濃さだけで空、くも、山、草原をかき分けており、これはとても難しいと思います。

ポツンと一つだけの小屋がさびしげですが、松の力強さがそれを支えているように見える、たのもしさがあるやさしい絵だと思いました。

同じ作品であってもとらえ方が少し違ってくるのも、興味深い。例えば、①の作品を取り上げた次の二つの鑑賞文を見ていただきたい。

私はこの作品を見たとき、「素朴」という言葉が直感的に頭をよぎり、そこに魅力を感じました。また全体がぼやけており、色合いから暗い印象を持ちました。

まず、時間についてです。私の中で、この絵に対しての季節や時間帯などは浮かびませんでした。二人の人間が大きな船をただただ漕ぎ、その横に工場がいくつも建てられ稼働しているという様子が浮かびました。次に色づかいについてです。全体的に黒をベースにしており、水面は白で表し、近くに建っている工場は濃く、遠くなるにつれて薄く描いています。その煙突などの薄さから、霧がかかっているようにも見えます。また長い煙突を持つ工場は比較的濃く、煙突が短い工場は白に近い薄い色で描かれています。煙も黒く描かれており、その黒さが空まで広がってしまっていることから大気汚染を連想しました。次に構図についてです。一番手前にある船や人は一番濃く描かれています。しかし中心にそびえる大きな煙突が、船や人間をより小さく見せ圧倒しているように感じます。見せているだけでなく、実際に描かれている人の小ささに驚きました。このことから、人の手ではなく世の中がどんどん機械に頼る、機械化がすすんでしまっていると感じました。そう見ると、この小さな絵の中に何本も煙突が書かれてしまっていることから、寂しさを感じてしまいました。

はじめは作品の素朴さにひかれてこの絵を選びましたが、時間をかけじっくりと鑑賞するうちに、この絵に寂しさを感じました。色合いや構図などからも暗い印象を与える作品ですが、わたしはこの作品が好きです。

Sさんの鑑賞文

この絵を初めて見た時、私は夕暮れの港工場をイメージした。えんとつからは煙が出ているので、一見、人々が工場で働き始めた時間帯の絵にも見えるが、空の優しく薄暗い色使いから、私は夕暮れ時ではないかと考えた。また、水に浮かぶいっそうの船が、静かな感じを引き出しているように思う。そのため、ガタガタと工場から音がしている朝というよりは、仕事が終わった夕方頃というイメージを持った。

この絵は非常に細かい部分まで丁寧に描かれている。水にうつるえんとつも、ただ描かれているだけではなくゆれている。おそらく、船が通った後だからであろう。また、建物の色の使い方を換え、遠い部分は薄く、手前の部分を濃くしているため、奥行きがとともわかりやすい。えんとつから出ている煙が私の一番のお気に入りである。煙突から出て、風に流されて空に消えて行く様子がとてもよく表現されている。ふんわりと流されている様子から、風が優しく吹いているような状況が浮かぶ。また、よく見ると、船の上には人が描かれているのだが、よく見ないと気づかないような細かい絵が隠れているというのも、この作品の面白い所であると感じた。

私は、この絵を見れば見るほど、この絵の中の世界に入り込んだような気持ちになる。優しい夕焼け、心地よい風、水は夕日が反射してキラキラしている、そんなイメージを持てるこの作品に、とても魅力を感じた。

Iさんの鑑賞文

4 学習を終えて

学習後に学生は感想を寄せている。大まかに整理すると、次のようになる。(表記は、学生の表記のまま)

(1) 芝作品に関わって

①本物の作品に間近に触れることが出来たことに感動している。

- ・100年前の絵が見れて感動しました。
- ・100年前の絵を近距離で見れたので、とても嬉しかったです。
- ・100年も昔の絵がこうして残っていて私たちが見れるということは、とても素晴らしいことだと思いました。
- ・本物の絵だときいて、とてもおどろきました。すごく美しい絵でした。
- ・本物だということに驚きました。ほぼ百年前のものが目の前にあることなんて、今までになかったので、とてもドキドキと興奮しました。

②描き方や色使いのすばらしさに感動している。

- ・100年前の作品でも色が残っていて、遠くから見てもきれいでした。近くで見ると細かく描かれていて、人や物の模様まで描かれていました。
- ・絵をよくみると鉛筆しかつかわれていなくて、濃さの差をつけて表現されていて、とても素晴らしい作品だと感じました。

- ・ えんぴつだけの作品は色を使っていないのに色がついているように見えました。思わず見入ってしまう作品ばかりでした。えんぴつの濃淡や木の枝ひとつひとつまで細かく描かれていて、圧巻でした。
- ・ 100年前の風景はもちろん見たことはないけれど、あの絵は細かい所まで描かれていたし、色使いや塗り方等がリアルで、実際にその風景を見ているような感じになれてよかったです。

（2）鑑賞したり鑑賞文を書いたりすることに関わって

①手にとって間近で見られたことで、気づいたり感動したりしている。

- ・ あんなに絵を近くで見たり、じっくり見たりすることがなかったので、すごく新鮮だったし、新しいことに気付いたり、絵からイメージや状況を読み取ることができてすごいなあと思いました。
- ・ 100年前の絵を実際に手に取り、見ながらの学習は初めてだったので楽しかったです。古い紙に描かれた絵を見ると、歴史を感じることができました。
- ・ 遠目で絵を見て書いたり記憶を頼りにして鑑賞文を書くよりも、実物を間近でみて書くのは、感じるものや思うことがあり、とても良いと思いました。また、近くで絵を見る、触れるという機会は普段中々ないので、とても新鮮で見ていて楽しかったです。
- ・ 遠くにあるよりも近くにあった方が自分の中により色んな感情や思いが生まれやすかったです。遠くにあるときは、ただ凄く上手い！と思っただけでした。しかし、自分の間近に来て、より細かいところまで見れたし、その絵を描いている姿が頭の中に現れました。

②鑑賞文を書くことに難しさを感じながらも、楽しさや手応えも感じている。

- ・ 鑑賞文を書くのはすごく難しかったです。自分が見て感じたことを言葉にして、さらにそれを文章にする。どれだけ絵を見て感動しても使える言葉を知らなければ鑑賞文は書けないなと思いました。
- ・ 題名が書かれていない昔の絵を見てどう思ったのかを書くのは、とても難しかったです。でも、この絵はなにを書いているのか考えるのは楽しかったです。
- ・ 思ったこと感じたことを文章で表すことは難しかったです。でも、とても貴重な絵で鑑賞文を書いて、素晴らしい体験をさせていただきました。ありがとうございました。
- ・ 絵を見て文章を書くのは難しいなと思いました。でも細かい所まで気づくことができたのでよかったです。
- ・ 絵をみてどういう風にその良さを伝えるかなど、表現力を鍛えるのにとっても良いと思います。また、作者が何を伝えたかったのかを考えるのも面白かったです。
- ・ 初めて鑑賞文を書いて、すごく楽しさを感じました。絵を見て色々な想像を膨らませてい

くうちに、まるでその絵の世界に入り込んでいるような気持ちになりました。いつもは絵を見て「すごいな」「上手だな」など、その時の気持ちだけで終わってしまうけれど、今日鑑賞文を書いてみて、改めて絵の素晴らしさや良さを知ることができました。

- ・自分で美術館を訪れても、そこで感じたことを文字におこすことは滅多にしない。心で感じて終わりである。文字にすることで、その作品への印象が具体化され、自分の感じ方を知ることでもできた。これからは鑑賞した後に文字におこす機会を増やしていきたい。素敵な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

このような感想から、

全ての作品が100年も前の本物であり、
現代の子どもたちにも通じるような題材で繊細に美しく描かれている絵であったこと、
一人一人が気に入った作品を手にとって間近に鑑賞できたこと

が、効果的な学習につながったと考えられる。

5 付記

今回の鑑賞文の指導に関わって、芝千秋の作品をお貸しくださった佐倉市立美術館と、作品の選定等でご助言いただき、いろいろと取り計らってくださった学芸員の木邨かおり様に感謝申し上げます。

6 注、引用、参考文献等

- 1) 上野行一「鑑賞教育はなぜ必要か」『まなざしの共有アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』2001 淡交社 p17
- 2) 同上書 p19
- 3) 芝千秋(1877～1956)日本画家。佐倉藩士の子として生まれ後に明治洋画壇をリードした浅井忠(あさいちゅう)に、新しい日本画を描くために洋画を学んだ。

- ・「小学校学習指導要領」2008 文部科学省
- ・「中学校学習指導要領」2008 文部科学省